

## 地元学・地域学の展開

内田 忠賢（奈良女子大学）

地元学・地域学の流れを整理し、報告者が関わった2つの学問的試み、「都市民俗生活誌」、「なら学」を、その流れに位置付ける。また、2000年代以降の地元学・地域学の展開にも注目したい。

戦後日本における地元学・地域学の展開について、すでに高野岳彦（2008）が的確に整理している。1970年代までは、主に研究者による地域研究 Area Studies、地域科学 Regional Studiesとして取り組まれ、また1980年代には、学校教育の一環として、郷土教育が再評価され、さらに1990年代前半には、社会教育の一環として展開した。90年代後半には、社会教育、特に生涯教育活動となった。2000年以降、各地で社会教育・生涯学習として定着した。90年代以降の展開の中でも、特に影響力があったのが、結城登美雄と吉本哲郎という東西2人のリーダーたちであった。

一方、地元学・地域学の推進主体および地域枠組みによる分類を、廣瀬隆人（2006）が行っている。廣瀬によれば、①自治体の地域振興・生涯学習としての地域学、②民間団体による地域学、③大学など高等教育機関が行う地域学、④結城登美雄と吉本哲郎が推進した地元学、という分類である。山形県生涯学習文化財団によれば、2016年段階での全国の地域学団体は77（同財団HP）あり、推進主体は実に多用だという。また、廣瀬論文が収録される『季刊東北学』（2006）によれば、「地名+学」は全国で軽く3千は越えるだろうと指摘する。

報告者は2000年代以降、「都市民俗生活誌」資料の整理、「なら学」研究の発信を行った。前者では編著『都市民俗生活誌文献目録』（岩田書院）に整理し、後者では『大学的奈良ガイド』（昭和堂）を編んだ。後者はその後、全国各地の研究者がそれぞれの地元をフィールドに、現代的視点から地域を読み解く『大学的○○ガイド』（昭和堂）を執筆・編集し、既に20冊が公刊された。

前者の資料を全国的に調査する中、次の地域学・地元学の取り組みに注目した。

『さっぽろ文庫』（総100巻中、市民生活の記録は全14巻、1977～2002年、札幌市教育委員会編、北海道新聞社発行）、『盛岡物語』（全10巻、1973～79年、盛岡の歴史を語る会編、熊谷印刷出版部発行）、『シャベル -語り継ぐ町の歴史-』（全7巻、1992～98年、高齢者セミナー「私達のまちの歴史を掘り起こそう」編、川崎市教育文化会館発行）、『老舗の街・尾張町シリーズ』（全27巻、1982～2009年、石野虎一編、金沢市尾張町商店街振興組合・尾張町若手会発行）、『旧四日市を語る』（全25集、1989～2015年、旧四日市を語る会編・発行）である。

上記で紹介した活動、取り組みの背景や意義だけでなく、生活記録が活字媒体からWeb上に移行しつつある2000年代以降についても論じたい。

### 参考文献

高野岳彦(2008)「自地域学ムーブメントと「地域学」の分類試論」地理 53-6

内田忠賢編(2012)『都市民俗生活誌文献目録』岩田書院

内田忠賢（2020）「地域学・地元学の系譜」奈良女子大学文学部研究教育年報 17

奈良女子大学文学部なら学プロジェクト編(2009)『大学的奈良ガイド』昭和堂

